

---

# 鴉と私の出会いと仕事

田中 2 3 号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鴉と私の出会いと仕事

### 【Nコード】

N7908Z

### 【作者名】

田中23号

### 【あらすじ】

霊能力を身につけてしまった女の話。

「ねえ、馬鹿鴉、どこ行つてたの？今日は仕事だつて言つたでしょ」  
都心に程近いベツトタウンの少し外れ、学生街のボロアパートの2階の角部屋、夕日が容赦なく刺しこんでくる部屋の中で私は、これまたぼろぼろの窓の柵に止まつた鴉に話かける。

私はすぐに出かけられるような格好でずっと待っていたのだが、相棒のこの化け鴉が事前に伝えていた時間になつても帰つてこなかったものだから、随分長い間待ちぼうけをくらつて頭にきている。

「かー」

しかし、相棒は馬鹿にしたような目をして私を見据え、人間の言葉なんぞは理解できないと言いたげに、どこまでもすつとぼけた鳴き声を返すものだから、怒り心頭になる。

私はお茶を飲んでいたちゃぶ台に手をつけて立ち上がる。ちゃぶ台に積んであつたみかんが崩れ、湯のみのお茶が揺れてこぼれるのも無視して、万年寢床のせんべい布団を跨ぎ、窓の近くまで行くと、入り込む夕日に眩しさを感じ目を細めて、相棒の頭に手を乗つける。

「ねえ、何を可愛い鳥の真似をしてるのかな？」

そう私が最大限の威圧を込めて言うと、鴉は夕日を背中に浴びながら私の目を見て、その鋭いくちばしを開く。

「ちつ、分つたよ。行けばいいんだろ、行けば」

鴉から少年のような少し高い声が私のもとに届く。

「最初からそう言っていればいいのよ」

私は鴉の頭に乗っけていた手を、今度は窓の柵の前へと差し出す。そして鴉は、私の手に足をかけ、痛みも感じさせずに腕を上り肩にとまる。定位置に落ち着いた鴉を見て、私は夕日に背を向け玄関へと歩き出す。

そうは言っても、部屋の窓から三步のぼろい襖を開けると、ほとんど使わない台所が広がっており、そんな台所の歩くたびにぎしぎしと軋む板張りの床をまた三步、計六歩で玄関につく。

私は靴を履き、すこし歪んでいるようにも見える扉を開け、たてつけの悪いそれに悪戦苦闘し、鍵を閉める。冬の寒さを身に受け、少し身震いして、白い息を吐きながら通路を歩くと、ここの住人でなければまず上ろうとは思わないだろう階段を下る。夕日が家々の影をつくる中、私は肩に鴉を、手をポケットに突っ込んで歩く。

「おい、今日はどんな仕事なんだ？」

鴉は周りに人通りがないことをいい事に、私の耳元で喚く。

「周りに人がいないときは話していいけど、あんまり耳元で大声を出さないで。今日は、駅前の不動産屋から依頼のあって回ってきた仕事よ。どうせまたちゃんけな幽霊が暴れてるだけでしょ。近場の依頼だからって優先的に回してくれたのよ。おかげで学校終わってから仕事が出るわ。気の利く役所に感謝しないと」

私は、あまりの寒さに固まっていた口を動かして鴉の質問に答えてやる。

私のいう役所とは、この国で怪異による事件を解決するために存在する機関だ。

怪異とは、簡単に言ってしまうえば、幽霊とか怨念とか、そんな感じのものである。私も詳しくは知らない、どうせ知っても知らなくてもやる事は変わり無いし。一応専門の学校もあるらしいが、私は生憎と独学でやってきたので、今でもたまに初歩的な事を知らないで驚かれる。

私のこんなオカルト事の教科書は、昔実家で見つけた曾祖母の手記である。

今の自分がもしそれを見たとしても、曾祖母はオカルト趣味だったのかという感想を抱くだけだろうが、幼い私は純粹だった。

だからそこに書かれていたお札の作り方を見て作ってしまったのだ。それで何もなしに終われば、後年そのお札を押入れから見つけてベッドに顔を埋めればいいだけだったのだ。

しかし、当時かっこいいと思っていたポーズでお札を投げた私の目には、それこそ弾丸のようにそれが飛んで行き、庭の木に深々と刺さった光景が写ったのだ。

その光景に、好奇心よりも恐怖心が勝り、この事は無かったこととして処理することが私の中では決定した。

だが私は見事に霊能力を開花させてしまった。

なぜ分ったかというところ、その数日後に両親の墓参りに行つとき、幽霊っぽいものが見えてしまうようになってることに気づいたからだ。

だから結局、曾祖母の手記を部屋の引き出しに厳重保管し、それを教科書に勉強することにした。

別にそこかしこに見えるわけでもないし、襲われるということも当時は無かったのだが、何か恐怖みたいなものに駆られて猛勉強した。おかげで、今では実力的には一流と自負できるほどだ。

そんな私がこの業界を知り、学校の合間に仕事をしだしたのは、この相棒の鴉がきっかけだった。

その日私は、進学のために都内に越してきてまだ日が浅く、そのために散策に出て見事に道に迷っていた。そうしてベッドタウンの中にあつて、まったく別の雰囲気にする、夕焼けの光を浴びた木々が生い茂る、どこか幻想的な小さな神社に吸い込まれていった。

別に神社に用事があるわけでも、見覚えがあつたわけでもないのだが、変な胸騒ぎがして、どうしても放っておけなかったのだ。何も無ければよし、何かあれば逃げればよし、そう思い神社に足を踏み入れた。途端後悔することとなった。

「ぐるおおおおおおおおおお」

今までに見た事がないほど大きな幽霊的な何か、今思えば立派な鬼、とそれに比べたら小さすぎる鴉の戦いが目に入った。幽霊的な何かは2メートルはあるかという体躯に、しかし全身は霧のようにおぼろげで辛うじて鬼のような輪郭を有していた。鴉はどこにでもいそうな、鋭いくちばしの真っ黒い体だった。

すぐさま私は来た道を戻ろうとしたのだが、視界の端に鴉が吹き飛ばされるのが見えて、反射的に駆けだして、鴉と鬼の間に入ってしまった。

咄嗟に恥ずかしいと思いつつ詠唱を行い曾祖母の手記直伝の結界を張ると、効果があるのか、鬼の動きが止まった。

鴉を抱えて逃げようと振り返るとそこには居らず、再度前を向くと私と結界にひびをいれている鬼との間に鴉はにいた。

「おい、人間！とつと逃げろ！お前じゃこいつに敵わん」

そう鴉が私に向かって言ったのだ。

私は、幽霊だつてたまに話せるやつもいるんだ、鴉が会話できてもおかしくないと、どこか見当違いな理解をした。

そして、鴉がしゃべっていることよりも、その言葉への反発を覚えてしまった。

別に自分は正義感が強いとはこれっぽっちも思っていないが、こいつに負けそうになっていた鴉が、よりにもよって私に勝て無い告げるのがとても腹立たしかったのだ。自分のことではあるが、少しばかり歪んだ負けず嫌いだと今になって思う。

「うつさいわね！あんたこそ、地べたに寝転んでたじゃない！私がどうにかするわ、引っ込んでなさい」

精一杯の強気で私がそう告げると、鴉は一瞬こっちを見て、すぐに私の結界を破ろうとしている鬼に顔を戻す。

「問答してる暇もない！死んでも俺は知らないからな！三途の川はちゃんと渡ってくれよ！」

鴉はそう言つと、羽を動かし神社の木々の合間からこぼれる夕日の光を背に、鬼目掛けて鋭く急降下する。

「別にあんたに責任とってもらう気はないけど、なんで死ぬこと前提なのかは後でじっくり話し合いね！！」

果たして、私の叫びが聞こえていたか分からないが、鴉は一瞬こちらを見ただけで、後はひたすらにくちばしによる攻撃を繰り返していた。

私は鴉を視界の端に収めつつ、恥ずかしいとは思ったが背に腹は変えられないので、曾祖母の手記直伝の例の弾丸のように跳んでいくお札を、いつも忍ばせているポケットから出して、このお札を初めて作ったときの投げ方で鬼に向かって投げつけた。

何故かこのお札、それ以外の投げ方では、当時も今もあまり速く飛ばないのだ。

なんていじわるな制限だと思いつつ、鴉が突撃を繰り返す後ろで、私もその攻撃を繰り返した。



鬼は鴉に翻弄され、私に削られ、いい感じに動きが鈍り、気のせいか体も小さくなっているようだった。

しかし、私の手持ちのお札が無くなってしまった。元々、このお札は護身用の意味合いが強いので、一枚投げて怯んだところを逃げ出すというイメージトレーニングしかしてこなかったために、数を用意してなかったのだ。

「鴉さん！ちよつと大技いくから時間稼いで！」

などと、当時私の中で使いたい台詞ベスト3に入っていた台詞を鴉に向かって大声で言い、今でも恥ずかしさの抜けない、手記にあった邪悪なものを焼き尽くす聖なる炎の詠唱に移った。

もし私が小さいときにこの手記を見つけず、大きくなって見つけていたならば、そつと蔵に戻していただろう。そう思わずにはいられない、やばい大技が他にいくつも存在する。

鴉は私の叫びを聞いていたのか定かではないが、先ほどよりも更に速く攻撃し、鬼を私に近づけさせなかった。

そうして、全部覚えているか不安だったが、案外すんなり出てきた詠唱が終わりに近づき、とうとう私の長く辛い苦行が実を結びかけたところで、鬼が鴉を無視して私に突進してきたのだ。

私の詠唱は残りわずかだが、どうも間に合いそうになく、これは詰んだかなとどこか他人事のように思っていると、私と鬼の間に鴉が割り込み、その突進を受け止めようとしたのだ。

しかし、受け止めきれぬわけもなく、鴉は吹き飛ばされる。

私の真正面に、ピッチャー返しよろしく吹き飛ばされてきた鴉を、私は咄嗟に抱きとめた。敢え無く霧散する聖なる炎。

鬼がこちらに再度走ってくるのが見えた。顔なぞついていないのに、その姿はまるで必死な形相で追いつがる番犬のような、まさに鬼気迫るだと私は思った。

結界を張ろうとしたが、先ほどの大技詠唱でそんな力も残っておらず、ただ呆然と私は鴉をその胸に抱き、鬼が迫ってくる様をまるでスローモーション映像を見ているような感覚に包まれながら見届けていた。

その間に、走馬灯のように、お婆ちゃんのこと、あまり覚えていない両親のこと、数少ない学校の友達のこと、そして曾祖母の手記のことが頭の中をかけ巡っていた。

そして、鬼が私までもうあと一步と迫ったところで、視界が大きな人の背に遮られた。

その背中的人物こそが、今の私の上司であり、怪異のことを教えてくれる先生でもある、やさしく頼れる大きなおじさんで、私をこの業界へと引つ張り込んだ張本人でもある。

結局鬼は、おじさん率いる役所の面々により、あっけなく処理された。

鴉は幸いにも無事だったようで、私の腕の中で悪態を吐きつつも大人しくしていた。

私の冒険もここで終了するなら、少し平凡な人生になっていたかもしれない。

しかし、非常識な世界は私を逃すことなく、事情が説明された。

この鴉は、昔々に悪さをして神社の中の岩に封印されていたそうで、あの鬼が鴉の力を得ようとその封印を壊したそうだ。

おじさんたちは、元々最近ここら一帯に出没する鬼を討伐するために調査をしていたらしいのだが、大きな力の反応があったので急に来たとのことだった。

この説明を受けて、やっとこの不可思議な状況を理解し、同時にこれで終わりかと、ほっと息を吐いた。どうも私は霊的なものが見えるだけの一般人として扱われているようで、実際自分

はそんなものか、特に変な組織に勧誘されなくてよかった、と思っていた。

しかし、次に待ちうけていたおじさんの言葉によって、結局私も非常識な世界の住人になったのだった。

「その鴉はまた封印しないといけないんだ。こっちに渡してくれるかな？」

おじさんからすれば当たり前の業務で、そのための言葉だったかもしれないが私にとってはそうでなかった。

なんせ、この鴉は一時とはいえ一緒に戦い、何故か私を心配し、身

を挺して守ってくれたのだ。岩の中に戻すなんて到底承諾できるものではなかった。

今思えば、都会に一人で出てきて心細い思いも多分に、そう多分にあつたのだろう。

気づくと、私は必死におじさんに頼み込んでいた。

「この鴉は私を守ってくれたんです！私が世話をします！悪さなんてさせません！だから見逃してやってくれませんか？！」

おじさんは最初驚いたようにしていたが、私の必死の願いを聞き、思案顔で提案してきた。

「じゃあ、君がこの鴉を式鬼にするといい。式鬼というのは、怪異と契約することによってそれを使役することだ。そうすれば、鴉は君のものになり封印しなくて済む。ただその場合、うちの役所の所属になつてもらふ必要がある。ある程度の知識をこちらが与えたら、仕事もこなしてもらふことになる。今日みたいな鬼は珍しいほうだが、それでも命の危険がある仕事だよ？」

それでもやるかい、とおじさんが続けた。

私の決意は揺るがないが、先ほどからだまっている鴉が気になり話を向けた。

「俺は、結構な悪さもしてきた。お前の式鬼になつたからって、もしかしたらどうにか逃げ出してまた悪さをするかもしれないぜ？それでもいいのか？」

悪さをすると事前に言う奴がどんな悪さをするのか、そう思ったが口には出さず、ただ少し笑ってしまった。

結局、今肩に乗っている鴉が相棒になって一年たつが、悪さをしたためしがない。

そして今日もいつも通り、私は仕事に精を出すのだ。

やがて夕焼けが彼方へと沈み、夜が訪れる。

そこは、昼とは違った世界になる。

そう、怪異蔓延る魑魅魍魎の世界だ。

私は気合いを入れて、その敷居をまたぐ。

さあ、仕事の時間だ。

(後書き)

やっぱり人称が迷子です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7908z/>

---

鴉と私の出会いと仕事

2011年12月25日14時52分発行